



TITLE:

佐々木哲夫君

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 佐々木哲夫君. 天界 1921, 1(9): 151-157

ISSUE DATE:

1921-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159596>

RIGHT:

## 佐々木哲夫君

山 本 一 清

「ササキテツヲ二二ヒゴゴ六シスセイゼンノカウヒヲシヤス」此の電報を受取つたのは、去る二月二十三日の夕暮で、自分は宅で妻と食後の無駄話をしてゐる時であつた。丁度其の無駄話の中で、

『佐々木君はどうしてゐるだらう。最早、好くなつて歸つて来るのも遠くはあるまい』

など、樂觀的な心でゐた矢先であつたから、此の電報は、始め一目見て、どうしても本統とも思へず誰かゝ惡戯をしてゐるのではあるまいかといふ氣さへして、むしろ一種の腹立ちさをさへ感じた。――

しかし心を落付けて見れば、電文は嚴として、正しく事實を報じてゐるのである。くりかへして其の文意を確めると共に、忽ち胸中には、言ひしれぬ悲しみと淋しさが襲ふて来るのであつた。

『あゝ佐々木君は去つたのか！』

かう叫んで妻と顔を合はせたまゝ、次の語が出な

つた。

佐々木君と自分と相知つたのは、大正四年であつた。其の頃、自分は研究のため、岩手縣水澤の緯度觀測所にゐたのであるが、思へば其の年の四月末の或る日、――まだ此の地方では暖かな春の日の訪れない何となくうら寒い日であつた、――佐々木君は佐藤君の紹介狀を持つて來訪せられた。聞けば、近頃盛岡師範學校を卒業したのであるが、病氣のため直ちに就職せず、醫師のすゝめにより當分靜養する筈だといふ。それから、元々天文學が好きで、此の日自分を訪ねて來たのも、つまり去る頃、自分が或る雜誌に天文の事項を寄稿したのを讀んで、始めて名を知つたのによるのか。丁度此頃、自分は研究の餘暇の話し相手が無いのを淋しがつてゐた時であつたので、其の日は可なり長く同君を引きとめて、天文の話やら、天文でない話やら、いろんなことを話したと覺てゐる。御蔭で、其の夕暮時に、宅を辭し去られた時には（初對面ながら）互ひに可なり名殘を惜しんだ。

佐々木君の郷里は水澤と同じ岩手縣ながら、距離

は十五里も距たつてゐて、汽車で一の關に下りてから、まだよほど長い山道を越わなければならないのだといふ。しかし差當つて、身に職が無いといへば呑氣は呑氣で、往復の道の遠いのは案外、苦にもならないらしく、同君は其の後も度々やつて來て、木村博士やら自分やらを相手に質問や研究をせられた何しろ師範學校在學時代からも優等生であつたやら、殊に天文学を修めるために必要な語學と數學とが得意だと來てゐるから、殆んど獨學の進歩は非常に速かつた。少し大袈裟に言へば、手當り次第に總ての書物を讀破して行くといふ調子で、一ヶ月目か二ヶ月目か、毎度郷里から水澤に來らるゝ度毎に、常に必ず新しい收穫が見えた。遂に自分には、『此の人は病氣靜養期を消すために勉強してゐるのか、或は勉強したいために病氣になつてゐるのか』を疑はれるほどであつた。

佐々木君の獨學の熱心は、彼れが最後までの武器であつた。自分は大正五年の春に水澤を辭して、京都に歸つたが、同君は其の後も、やはり時々水澤へ行つて、専ら木村博士の御指導を受けたらしく、同

君の手紙や、博士の御言葉によると、大正六七年頃には、獨逸語を自習して、遂にはクリンケルフェスの理論天文学を讀むまでに漕ぎつけたといふ。現に自分の所へも練習かたぐいだと言つて、獨逸文の書面を二三度よこされたことがある。

永く交つて見ると、佐々木君は單なる科學上の天才といふのみでなく、音樂にも、繪畫にも、又一般の文藝方面にも深い理解を持ち、尙、思想問題にも一見識を抱いてゐたやうである。自分も宗教や哲學には少しばかりの興味を持つてゐるところから、同君の意見を知らいたために、或る問題を以つて數度議論を交して見たことはあるが、遂に徹底した持論を聽くことを得なかつたのは、今尙頗る残念に思つてゐる。

大正七年には病氣が全快したからとて、同年四月からは一小學校に奉職するやうになつたが、此の教壇上の活動は、同君として餘り氣が向かないらしくやはり自らはもつと自由に勉強したいといふと、來る手紙毎に、そんな意向を漏らしてゐられた。

大正八年春、いよいよ教職を辭して、京都大學天

文臺に入らるゝやうになつたのは、確かに同君のためにも、又、京都天文臺のためにも喜ばしい一新時機であつた。自分は同君が始めて京都の土地に足を踏み下された日、七條驛に之れを迎へた時の印象を今も鮮かに覺えてゐる。其の時、自分としては九三年ぶりに元氣な同君の顔を見るといふことが既に（ごく箇人的ではあるが）大なる喜びであつたが、同君自らは、もつと雄大な喜びがあり、又満面希望と得意に充ちた花婿のやうにも見えた。（凱旋將軍の如しといふのは、少しく不適當だと思ふが。）

京都に來られてからの佐々木君は、やはり徹頭徹尾勉強の人であつた。但し天文臺の職員としては、やはり公人であるから、先年、郷里で靜養中の頃のやうに勉強のための絶對自由といへなかつたかもしれない。何となれば單なる御役所風の事務も少しは有つたから。けれど、何と言つても、それは範圍の狭い一局内の事務であり、又それが仕事の性質上、研究に直接關係があることのみなので、此等は決して同君の勉強を妨げるほどのものではなかつたと信ずる。同君は暇があれば、乞ふて諸教授の講義を傍

聽し、堂々たる大學生達と席を同じくして、自ら其の才を磨いた。又、晴夜には、勿論、天文臺に居残つて、自分等と協同觀測に従事した。此の頃、天文臺内の平常の話相手は、百濟君と同君と自分と三人で此の三人が、日曜といはず、祭日といはず、又夜となく、晝となく、顔を合はせてゐたのであるが、今も思ひ出すことの一是、佐々木君は身體の健康には特別に注意を拂つてゐたことである。百濟君と自分とは觀測の都合上ずいぶん遅くまで夜を更かし、時々徹夜することもあつたけれど、佐々木君は決してそんな無理はしなかつた。夜半までには必ず宿に歸つて安眠し、其の代り、朝はよほど早く床を離れて吉田山に上るのが、きまりであつた。流石は嘗て病氣に悩まされた人だと自分共は常に感心してゐた。天體觀測の中で、佐々木君が最も忠實熱心にやられたのは、恒星の子午線通過による時刻觀測であつた。之れは天文臺其のものゝ性質上、言はず一種の義務的觀測ではあつたが、同君は委託された此の仕事を決して義務だからといふ顔をせず、むしろ願る研究的な態度を以つて、熱心に、且つ忠實にやられ

た。之れによつて、自働印字器等に改良を加へられた點も少なくない。

しかしながら、佐々木君をして、一躍、世界的の名を馳せたのは、確かに、かの彗星の發見であつた尤も彗星の搜索といふことは、京都でも同君だけがやつてゐたのでは無い。又同君としても、すいぶん以前から、晴れた夜には西天を搜されたのである。

殊に大正八年十月中旬頃、米國からはメトカーフの發見した彗星が二つも見ゐるといふ報知が来るやうになつて、推算位置の不明な此の二彗星を、我々は毎夕毎曉苦心して搜したものである。結局、メトカーフ第一彗星は自分が十九日拂曉の東天に之れを見出し、同第二彗星は佐々木君が同十九日夕暮の西天にそれらしいものを認めた。しかし尙之れにも飽き足らず、佐々木君は其の次の日も、次の日も望遠鏡を西南の空にむけて、目ばしい天體を搜してゐられた。

十月二十六日、此の日、空はよく晴れたが、自分は用事があつたため、日没後、メトカーフ彗星を観測した後、九時頃歸宅した。すると間もなく十時

頃、佐々木君が、突然、宅へやつて來て、

『只今、新彗星らしいものを見た』

といふ。其の顔は可なり緊張してゐた。自分は驚いて、先づ其の發見事情を精しく聞くと、同君が言ふのに、

『昨夜、八時半頃、四時望遠鏡で山羊座へ星附近を搜してゐますと、突然大きな星雲狀のものが見えました、今夜又それを見ると、既に位置をかへてゐて、現に半時間ほどの間にも確かに動いてゐるのが知れました。』

『それぢや今から直ぐ僕も行つて、それを見やう』  
『しかし今は最早西に沒した頃ですから、明日でなければ見えますまい。』

なるほど其の時は十時を越えて、山羊座あたりは沒してゐる頃であつた。

翌二十七日は朝早くから例の三人が相談をした結果、(丁度此の頃、新城博士は米國漫遊中であつた)昨夜佐々木君が見た星は確かに新彗星に違ひないこと決し、取りあへず東京天文臺に電報を打つた。それから西洋諸國にも知らせる筈であるが、之れには今

一度觀測をして、運動の模様を知つてからにしやうと決めた。

二十九日には完全な觀測が行はれた。最早何の疑ひもない。そこで三十日にはコペンハーゲンへとハアブアドへと二通の發見電報を認めたが、學長の許可を得るため、少々手間を取つて、發電は翌三十一日、丁度天長節祝日の日、佐々木君が自ら京都電信局へ打ちに行つた。

此の彗星が全くの新來者か、或は週期彗星の再現したものかとは、我々の次の問題であつた。何しろ固有運動が非常に速いので、ただの星では無いと思つたが、之れについては東京の神田氏が逸速くフインレー彗星の再現であると推定せられた。しかし此の星が以前の星の再現であるか否かは、今の場合、大した問題でない。それは要するに理論家の問題である。事實としては、佐々木君の此の彗星は、世界中の誰も知らないものを、熱心によつて發見したのだといふことで充分である。之れを世界的に見るときに、年々、天文學界に發見される彗星の數は、三個か或は五個かといふ程度のもので、大して珍らし

今いものではないが、我が日本に於ての彗星發見はまでに一度も無かつた。今、我が佐々木君によつて行はれた此の發見は、實に本邦最初のレコードを作つたものとして、遠く後世にまでも傳へらるべき事件であるが、尙いゝんな事情を見ると、佐々木君の彗星發見は、單に此のフインレー星のみではない。前に述べた通り、十月十九日の第二メトカーフ星の發見も、當時同君の手許に何も積極的な材料を持たずに、やはり熱心によつて先づ發見し、後になつて之れがメトカーフ星だと知れたのであるから、此の場合も亦、新發見の名譽を同君に歸すべきである。不幸にして此の後者が世に余り認められないのは遺憾のことと思ふ。——佐々木君は實に一週間以内に二個の彗星を發見したのである。

大正九年に入つて、火星や木星の接近といふ事があり、佐々木君は夜は又此等の觀測をつづけられたが、晝はやはり講義をきいたり研究をするのに多忙であつた。

此年の夏、自分は文部省の囑托によつて、二ヶ月ほど新潟縣下に觀測旅行を試みたが、其の旅行中に

出張先へ佐々木君から届いた一枚のハガキは、少からず自分を驚かした。中には『病氣のため、醫者のすゝめによつて、歸省養生する』といふ意味が簡單にかいてあつた。『最早大丈夫と思つたか……』と言つたまゝ、自分は此のハガキを見つめて、暫くは考へ込んだ。『病氣とは何だろう。以前の再發が？』いろ／＼と考へたが、明かではなかつた。兎に角之れも運命かと觀じ、一向其の快癒を祈るより外には途がなかつた。

夏の暮れ、旅行から歸つて、研究室に君の不在中の机を見た時は淋しかつた。しかし、始め歸省した時の容體が、敢へて重態といふ程ではなかつたけれど、夏休みの休養を兼ねて歸省した方がよからうと醫者からのすゝめによつたのであると言ひ、又、歸省してからも漸々好い方であるといふ手紙が來てゐたので、

『秋にでもなれば、又來られるに違ひない。』  
と思つて、自分等は餘り心配はしなかつた。

同君自身も、靜養中ながら、やはり好きな星は見ずには置けないと見て、十一月の末頃であつた

か、

『オリオン座の東に彗星らしいものが見えるから』調べてくれといふハガキが來たことがある。之れは調査の結果、同君が双眼鏡だけしか手許に持つてゐなかつたため、星雲を見誤つたものと知れ、こちらからは其の由を返事したが、兎に角、病中にも觀測をやつてゐたのには、聞く者が皆驚いた。

歳の暮に近づいても、同君は歸つて來なかつた。

しかし病勢には變りがなく、只、醫師の言により、北國の冬を過すため、年末から或る病院に入ることになつてゐるとの報知があつたが、之れも自分等には大事件らしくは見えなかつた。毎日、氣にはかつてゐたが、時々の手紙をたよりにして、喜びの希望のを持ち、『その内に／＼』と待ちつゞけた其の期待が、遂に萬人の望む通りにならないで、『死す』の電文によつて報ゐられたのは遺憾此の上もない。

今となつては總てが思ひ出の種である。研究室に残されたさま／＼の遺物——其の中には同君が科學者としての精密觀察と、藝術家としての表現慾を、

一管の彩筆に托して書いた大きくて美しい火星の圖がある——それから紙片に記された手蹟など、あらゆるものについて、自分には今尙鮮かな記憶が生きてゐる。殊に自分との最後の別れといふのが、昨年の夏の始め、『出張して來ます、さよなら』と言つたきりで、彼れも我れも之れが最後の別離とは毛頭思つてゐなかつたのだから。

短かつた彼の一生、殊に其の中でも天文家としての得意時代は二年に滿たない。しかし此の短かい月日の間に、彼れは一躍して世界に其の名を擧げ、又忽ちにして世を去つたことは、彼れが発見した彗星其のものを擬人化したかのやうに、華やかにして又憐れであつた。あゝ彗星発見者自身が一個の彗星的奇才であつたのか。

自分には佐々木君のことは涙なしには書けぬ。

—(一九二二・五・一〇)—

君木々佐の室究研



Mr. Sasaki in Study

山々はくらやみに眠り風風ぎて

星のみ空に輝やける哉  
病む胸のいたみをわすれ一心に

美しき星を眺めける哉

此の儘に星を眺めて明くるまで

立ち居るを得ばと我は思ひぬ

(天 津 夫)